

国語におけるマ行音バ行音交替現象について

上野和昭

国語におけるマ行音バ行音交替現象（以下、これをMB交替現象、またMB交替とよぶ）については、すでに多くの論考があり、交替を起こす語についても、詳細な報告がなされつつある。^{〔1〕}本稿では、それらの諸論考を参照しつつ、中央語における交替の様相が、必ずしも史的に明らかでないと思われる二十一語について、調査した結果を報告し（表参照）、二・三の語については特に詳しく述べて、MB交替の傾向背景をさぐりたいと思う。

なお、本稿では、問題となる音節にマ行音をとる語形をM形、バ行音をとる語形をB形とよぶことにする。

まず、MB交替現象を調査した結果に基づいて分類すると、次のようである。

I〔B化〕……M形から、MB交替によってB形を生じたと考えられる場合。

イ〔B化第一類〕……M形からB形を生じて、一時両形並存す

るが、しだいに新しいB形が勢力を得て、M形が消えてゆくと考えられる場合。

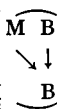
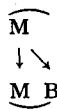
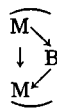
ロ〔B化第二類〕……M形からB形を生じて、一時両形並存しはするが、新しいB形の方がM形を圧倒しきれずに、古いM形に抑えられて消えてゆくと考えられる場合。

ハ〔B化第三類〕……M形からB形が生じて、両形並存していると考えられる場合。

ニ〔B化第四類〕……MB両形並存のところ、M形が消えてB形のみが残ったと考えられる場合。

II〔M化〕……同様に、B形から、MB交替によってM形を生じたと考えられる場合。（以下、Iに準じて考えられるので説明を略し、図式のみ示す。）

イ〔M化第一類〕……(B ↓ M)



資料 題形	記万紀奉鑑平新和乎平金院打栗色名假仮歌古古鑑和紀假堂樓下廊帳操温通抄中々日備假片補正玉羅浄																				
	和 紀	新 和	平 平	金 院	打 栗	色 名	假 仮	歌 古	古 古	鑑 和	紀 假	堂 樓	下 廊	帳 操	温 通	抄 中	々 日	備 假	片 補	正 玉	羅 浄
(1) アマシ アバシ	○	○				○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
(2) イナム イナフ	■					■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
(3) ウソムク ウソフク	△					△															
(4) ウソムク ウソフク																					
(5) ウネノ ウネベ	◇					◇															
(6) オモムク オモフク	▽					▽															
(7) オモムル オモフル						✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱	✱
(8) カガフル カウフル カムフル カマリ カウマリ カムマリ カンマリ	×	×	×																		
(9) カタムク カタフク	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★	★
00 カマミスシ カマビスシ	◆					◆															
00 ソネム ソネフ	▽					▽															
00 タハムル タハフル	✱					✱															
00 チナム チナフ	○					○															
00 ツクム ツクフ	■					■															
09 ツマビラカ ツバヒラカ	▲					▲															
00 トムラフ トラフ	★					★															
07 ネムル ネフル	◆					◆															
00 ネムル ネフル	▽					▽															
09 ハワムル ハウフル	■					■															
00 ムチ ウチ	○					○															
00 マモル マフル	□					□															

この表は、各題形が表出する資料のところに印がついている。
黒塗りの印はB形、白ぬきの印はM形となるようにしてあるが、直接MB交替に関わらない題形にはX印を用いた。

ロ〔M化第二類〕…
B ↓ M
M B

ハ〔M化第三類〕…
B ↓ M
M B

ニ〔M化第四類〕…
M B ↓ M
M

I・IIともニ〔第四類〕については、M化・B化と言いうるか疑問ではあるが、今一応右のように分類した。次に、それぞれに属す語をあけてみる。

I ロ…アバネシ・ソネム・マボル…

ニ…カマビスシ…

II イ…イナブ・ウツブク・カウブル・カタムク・タハブル・ツクム・ツマビラカ・ネブル(眠)・ハウブル…

ロ…ネブル(産)
ハ…トムラフ…

ニ…ウネメ・オモムク・オモブル・チナム・プチ…

これらの語の史の変遷を概観すると、前頁の表のようになる。なお、本稿で用いた資料の略号およびその出典を示せば、次のとおりである。

『沿革』 Ⅱ大矢透『仮名遣及仮名字体沿革史料』／『点研』 Ⅱ中田祝夫『古点本の国語学的研究』／『諷研』 Ⅱ同『東大寺諷誦文稿の国語学的研究』／『慈研』 Ⅱ築島裕『興福寺本大慈恩寺三藏法師伝古点の国語学的研究』／『新論』 Ⅱ同『平安時代語新論』／『語研』 Ⅱ同『平安時代の漢文訓読語につきての研究』／『漢

研』 Ⅱ小林芳規『平安鎌倉時代に於ける漢籍訓読の国語史的研究』／『大辞典』 Ⅱ『日本国語大辞典』／『大系』 Ⅱ『日本古典文学大系』

記〔古事記〕 ↓『大系』1／万〔万葉集〕 ↓『大系』4、7／紀〔日本書紀〕 ↓『大系』67・68／統紀〔統日本紀〕 ↓『新訂国史大系』

2／華音〔新訳華嚴経音義私記〕 ↓岡田希雄『新訳華嚴経音義私記倭訓攷』(国語国文11-3)／『大系』70／平

初訓〔平安初期訓点資料〕・金最〔西大寺本金光明最勝王経平安初期点〕 ↓春日政治『西大寺本金光明最勝王経古点の国語学的研究』三表〔智恩院藏大唐三藏玄奘法師表啓平安初期点〕 ↓『諷研』

・地輪〔大乘大集地藏十輪経元慶788年点〕 ↓『点研』・『諷研』／新〔天〕(新撰字鏡天治本) ↓京大文学部国語学国文学研究室編『新撰字鏡』(古典索引叢刊3)／和〔和名類聚抄〕 ↓馬淵和夫『和名類聚抄』(古字本文および索引)／平中訓〔平安中期訓点資料〕／平

後訓〔平安後期訓点資料〕・慈伝A〔大慈恩寺三藏法師伝A種点〕 ↓『慈研』／金最音〔金光明最勝王経音義承暦3107年鈔本〕 ↓川

瀬一馬編大東急記念文庫複製本／院訓〔院政期訓点資料〕・慈伝C・E〔大慈恩寺三藏法師伝C・E種点〕 ↓『慈研』・西記〔大唐西域記長寛元1163年点〕 ↓『点研』打〔打聞集〕 ↓古典保存会複製本／梁〔梁塵秘抄〕 ↓『大系』73／色〔前・愚〕(三卷本)色葉字類抄前田本・黒川本) ↓中田・峰岸『色葉字類抄研究並びに索引』

／名〔図〕(類聚名義抄図書寮本) ↓宮内庁書陵部コロタイプ版／名〔観〕(同観智院本) ↓天理図書館善本叢書／仮文(仮名文字遣) ↓『国語学大系』6／仮書状(仮名書状) ↓久曾神昇『平

安時代仮名書状の研究』／歌(神・催) (古代歌謡神楽歌・催馬楽) ↓『大系』3／古節(古本節話集) ↓『梅沢本古本話集』
 (勉誠社刊影印)／古今声(古今和歌集声点本) ↓秋永一枝『古今和歌集声点本の研究』／鎌訓(鎌倉期訓点資料)／和文(竹・伊・源・方・徒) (和文系資料 竹取物語・伊勢物語・源氏物語・方丈記・徒然草) ↓源は池田龜鑑『源氏物語大成』方は青木玲子『^本本方丈記総索引』他は『大系』9・30／紀私巫(日本紀私記御巫本) ↓古典保存会複製本／仮近(仮名遣近道) ↓『国語学大系』6／室訓(室町期訓点資料)／倭(倭玉篇) ↓中田・北『倭玉篇研究並びに索引』／下(教・春・文十七・文十一・禰・龜) (『下学集 東京教育大学蔵本・春林本・文明十七年本・文明十一年本・禰原本・龜田本) ↓中田・林『古本下学集』七研究並びに総合索引』／節(文・明・饅・黒・易・弘・永・堯・早) (『節用集』(文明本・明応五年本・饅頭屋本・黒本本・易林本・弘治二年本・永祿二年本・堯空本・早大本) ↓中田祝夫『古本節用集』六研究並びに総合索引』・同『印度本節用集』七研究並びに総合索引』・杉本つとむ『早大本節用集』本文・研究・索引』／頓(頓要集) ↓中田祝夫『中世古辞書』四研究並びに総合索引』／撮(撮要集) ↓同上／温(温故知新書) ↓同上／運(運歩色葉集) ↓同上／抄(史・蒙・四・毛) (抄物 史記抄・蒙抄抄・四河入海・毛詩抄) ↓『抄物資料集成』／中朝資(イ・シ) (中国語・朝鮮語資料 日本一鑑・捷解新語) ↓大友・木村『日本一鑑本文と索引』・京大文学部国語学国文学研究室編『捷解新語』・『改訂捷解新語』／キ口資(ド・伊・平難・金・ロ) (『キリシタンローマ字資料』ドチ

リナキリシタン・天草版伊曾保物語・天草版平家物語難語句解解・天草版金句集・ロドリゲス日本大文典) ↓小島幸枝『どちりなきりしたん総索引』・勉誠社文庫複製本・森田武『天草版平家物語難語句解の研究』・金田弘『天草版金句集本文及索引』・土井忠生訳『ロドリゲス日本大文典』／日ポ(日葡辞書) ↓『日葡辞書』ヘードレイ文庫本』岩波版／伽(御伽草子) ↓『大系』38／仮(仮名草子) ↓『大系』90／片(片言) ↓『国語学大系』9／補(貞享版補忘記) ↓『補忘記』貞享版／白帝社版／正(和字正濫鈔) ↓久松潜一監修『契沖全集』10／玉(音曲玉淵集) ↓早大図書館蔵宝曆十二1762年版本／謡(謡曲英華抄) ↓高羽五郎氏プリント本／浄(浄土真宗伝承音) ↓福永静哉『浄土真宗伝承音の研究』

二

次に、マモルマボル(守)の交替例を整理してみる。

〔甲〕マモル……①伊由岐麻毛良比〔記160べ〕②安佐麻毛利由布能麻毛利余〔万4094〕・之良奴日筑紫国波安多麻毛流〔万431〕③易諭者摩毛羅毗〔紀上207べ〕④助ヶ衛マモラむ〔平初訓(金最)1179〕⑤衛万毛流〔金最音一3ウ1〕・衛末毛流〔同六8オ6〕⑥衛兵マモリ〔院訓(西記)三55510〕・衛マモル〔同(西記)三5701〕・守護マモリマツル〔同(北野本天武紀院政期点)』語研』146べ〕⑦此律師ノカウテ立ヲ集テマモル公卿〔打三ウ10〕⑧十六多をこそまもるなれ〔梁352べ〕⑨たのもしきまもりなど・おそれあるまじきまもりにかきて〔仮書状(文泉抄紙背、承安元1171年頃)〕⑩守マモル〔色(黒)中93ウ4〕⑪扨マモル〔名(観)仏下ノ

本27オ」・衛マホリ マモル〔同仏上25オ〕・成マホル〔同僧中21オ〕⑩末毛礼止毛〔歌〕(催) 402ハ) ⑪まもりたつて侍なり〔古節1972〕⑫ぢかきまもりの(平平上平平(平))〔古今声〕(片仮名本願昭古今集注、文治元1185年願昭奥書) ⑬おし籠めて守り戦ふべき)〔和文(竹) 62ハ)・夜ごと人にすへてまもりせければ〔同(伊) 113ハ)・まもりよくいと御とをき心ちして〔同(源) 1186ハ10〕・必ス禁戒マモルトシモノナク〔同(方) 233〕・犬はまもりふせぐつとめ人にもまさりたれば〔同(徒) 187ハ) ⑭守マモル〔倭1803〕⑮衛マモル〔下(編) 691〕・衛マモラ〔下(春) 603〕⑯衛護マモリ〔節(易) 1417〕⑰守マモル〔温2401〕⑱von manorio Tanomitatemacuri〔キロ資(下) 3318〕… dôriuo namoru togiua〔同(伊) 43015〕… foreuo mamorigatai gotoku〔同(金) 本193c〕⑳Mamoritotoge・Mamori・Mamori, u, otta・Mamoriacaxi, ju, aita〔日ボ〕㉑無実の科を守り給はんとこの御誓ひなり〔仮山ハ〕

〔平後訓(不空彌索神呪心経寛徳二1045年点)『新論』486ハ)・護マホル〔同(石山寺藏阿吒薄俱元帥大将上仏陀羅尼經修行法儀軌嘉保二1095年点)『沿史』③成マホリテ〔院訓(慈伝E) 六199〕・貼マホリ〔法隆寺藏妙法蓮華経玄賛保安三1122年点)『語研』491ハ)・衛マホリ〔同(西記) 五612〕④女共ノ顔ノヒマホリワタス〔打10オ14〕⑤守マホリ〔色(黒) 中93ウ4〕⑥俣マホリ〔名(観) 仏上18オ〕⑦衛マホリ マモル〔同仏上25オ〕・成マホリ〔同僧中21オ〕⑧四方山の人の守りにする鉢を〔歌(神) 306ハ) ⑧な

をまほりは身にくすへきなり〔古節1467〕⑧守マホリは〔鎌訓(穂久通文庫藏貞観政要建治本)『漢研』1000ハ) ⑩うらやましくまほられ給ふ〔和文(源) 1419ハ14〕・一事も見洩さじとまほりて〔同(徒) 203ハ) ⑪閉マホル〔室訓〕(老子応安六1373年本および至徳三1386年本)『漢研』1663ハ1065ハ) ⑫衛マホル〔倭1586〕⑬衛マホル〔下(亀) 1015〕⑭守マホリ〔節(文) 83・(護) 998・(差) 1208〕⑮體マホル〔温2112〕⑯伯如マモル事アリト両点ソ〔抄(蒙) 二62オ〕・古成ト云ハ敵マモルフルキカマヘヲイフソ〔抄(四) 一ノ二24オ〕・祭レハヨクマホル程ニ〔抄(毛) 一九35オ〕⑰護護持格〔中朝資(イ) 通用311〕⑱Cayxo maboraye〔キロ資(平難) 10右6〕⑲Maboraye, uru, eta・Mabori・Mabori, u, otta〔日ボ〕㉑まだしきめなぐまほらせ給ふ〔伽290ハ) ㉒日夜に天をまほり〔仮224ハ) 右の《甲》マモル《乙》マボルニ形のほかにマブルの形もみられる。

〔丙〕マブル……①衛マブラ〔下(文十一) 373〕・護マブル〔下(文十七) 576〕②守マブル〔節(明) 1327〕・守マブル〔節(弘) 1704〕③昼ハ冠膚ママフリ〔抄(史) 一一85ウ)・十日ハカリマフリナラウタレハ〔抄(蒙) 三43ウ)・蕭望之カ門マフリニナツテ〔抄(四) 一五ノ一16オ〕・神ノマフリアルソ〔抄(毛) 二〇16オ〕④Maburi, u, utta, Meius (ユウマ) Maburi, u, Vide (見マ)・Maburi Vide Maburi〔日ボ〕

この語の語源が、「目十守ル」であらうことから考えても、そ

の本来の形はM形であつたらうと思われる。そして、上代語の資料となしうるものは、〔甲〕①②③で、M形だけである。B形マボルの初出は〔乙〕①のようにある。以下、平安・院政・鎌倉時代を通じて、表記上MB両形が並存しているが、〔甲〕①②〔乙〕⑥の差声の様子からすると、両形とも音声面に表われていただらうと想像される。室町時代にはいと、マボルの形もみられるようになる。この形は、マボルの母音交替形であるが、抄物に比較的よく見られるとはいうものの、たぶんに俗語的・俚言的なものだったと思しく、〔丙〕④の説明から、それが窺われる。室町時代以降、このマボルのほかに、やはりマモル・マボルの両形は並存する。おそらく江戸時代に中央語で、マボル・マボルの二形が消えていったものであらう。

今日の方言形には、マボル・マボルの二形も、処々に多くみられる。また岐阜には、マムリの形もある。
なお、「膳マハル」の例が、「三表62」にみえるが、おそらく、築島裕氏の言われるように、第二音節はバと濁音で、マボルの母音交替形と思われる。

松本宙氏は、この語を「m v b v m」と再変化の過程をたどる「一語に数えられたが、そのような変化ではなく、わたくしのいう〔B化第二類〕に属するものである。

マモルからMB交替によってマボルが生じたについては、まずマとモルとの複合が行なわれなくてはならない。モルが単独でボルに変わる可能性も無しとしないが、語頭の交替は余りに例が少ない。マモルという複合形ができたところで、破裂性のマボルの

形が生じたのは、マ行音の連続という緩慢な形を嫌う傾向があつたのであらう。

三

次に、オモムク―オモブク(赴)の交替例を整理してみる。

〔甲〕オモムク……①投火オモムキ〔平初訓(法華文句)〕沿史〕・赴(オ)モムカむ〔同(金最) 154 1〕・趣オモムク〔同(地輪) 552 22 点研〕②趣於牟牟久〔金最音補13オ1〕③端仰ヒタラモムキ固護ヒタラモムキ〔色(前) 下99ウ1・(黒) 下94ウ6〕・具趣ツラナルヲモムキ〔色(黒) 中28ウ6〕④飯オモムキ〔名(親) 僧下43ウ〕・化ヲモムク〔同仏上19ウ〕・趣ヲモムク〔同仏上38オ〕・赴オモムク〔同仏上36オ〕⑤をもむき趣〔飯文19べ上〕・おもむく趣赴〔同22べ下〕⑥歸ヲモムキ〔鎌訓(豊宮崎文庫古文尚書正和三1314年点)『沿史』・歸ヲモムキを〔同(五島美術館藏金沢文庫本貞観政要鎌倉中期点)『漢研』109べ〕⑦よき方に赴きて吹くなり〔和文(竹) 48べ〕・心さしのおもむきにしたかひて〔同(源) 79べ12〕・仏ノラシへ給フヲモムキハ〔同(方) 320〕・菩提におもむかざらんは〔同(徒) 138べ〕⑧赴ヲモムク趣ヲモムク〔倭160 6〕⑨歸ヲモムキヲ〔下(教) 6 3〕⑩趣ヲモムキ赴ヲモムク〔節(文) 232 7〕・赴ヲモムク〔節(易) 127 5〕・趣ヲモムキ〔節(弘) 65 6〕・趣ヲモムキ〔節(早) 69 4〕⑪織ヲモムキ〔温44 2〕⑫趣ヲモムキ〔運105 1〕⑬六経ハ各ヲモムキハ別ナレトモ〔抄(史) 一六40オ〕・走ノ音ハ奏トツクレハラモムクトヨムソ〔同一二42ウ〕⑭趣阿目無氣〔中朝資(イ) 通用2767〕・お

もむき(オモムキ)〔同(シ)原五3ウ、重六29ウ〕⑮・vonomugi
tamō coto [キ口資(下) 14ウ16]・Sono vomonugua... yoro
cōde furoni irōto vomonucaruni [同(伊) 434 e・417]・
figano xocuni vomonugi [同(金)本2821]・Cono vomonugi
〔同(ロ) 85 e〕⑯Vomonugi, Vomonugi, u, jia [日ボ]⑰一
度無常(たむげず)の風に赴かん時は〔伽467〕⑱御書をもむきかくの如し
〔仮128 e〕⑲赴おもむく〔正192 e〕⑳趣〔補〕

〔乙〕オモムク……教賜於毛夫氣賜〔統紀118 e〕・於母夫氣教
那牟〔同119 e〕②勅化オモムク〔平初訓(石山寺藏金剛般若集驗
記平安初期点)』『沿史』・赴オモムキ〔同(地輪) 541『諷研』
③化来マウオモムケリ〔平中訓(東洋文庫本推古紀平安中期点)』『語
研』178 e〕④歸オモムキ〔平後訓(慈伝A) 1044〕⑤赴マムク〔金
最音書入和訓10オ〕⑥赴オモムク者〔院訓(慈伝C) 9365〕・起オモ
ムキ来ル〔同(慈伝E) 1027〕・歸マムキヲ〔同(文鏡秘府論保延点)』『語
研』361 e〕・赴マウオモムク〔同(北野本孝徳紀院政期点)』『語
研』178 e〕⑦固護カタオモムキ〔色(黒)上90オ8〕・端仰ヒタラモム
キ固護ヒタラモムキ〔色(前)下99ウ1〕・(黒)下94ウ6〕⑧訝オモ
ムク〔名(観)法上33ウ〕・化マムク〔同(上)19ウ〕・趣マムク〔同
上38オ〕・赴オモムク〔同(上)36オ〕⑨趣マムク〔鎌訓(圖書寮藏
群書治要建長七1255年点)』『沿史』・歸マムキ〔同(稀久通文庫藏
貞観政要弘安元1278年点)』『漢研』1009 e〕・歸マムキ〔同(圖書寮藏
春秋経伝集解弘安元1278年点)』『沿史』・帰マムキ〔同(斯道文庫
藏貞観政要鎌倉期点)』『漢研』1009 e〕⑩オモムク(オモムキ)を
したためしむことは〔和文(源) 894 e〕

この語は、「M化第四類」に属すが、その語源を「面十向ク」と考えれば、「B化第二類」に属すべきものかもしれない。《甲》①《乙》①②からすると、奈良から平安初期頃は、もうすでに両形並存している。そして、B形が消えるのは、室町時代頃のように、中世古辞書の類以降、M形ばかりでB形はみない。有坂秀世氏・松本宙氏は、平安初期にオモムクがオモムクに変化したように述べておられるが、わたくしは、古く両形並存であったとしか言えないと思う。

オモムク→オモムクの語源が、「面十向ク」であるとすれば、やはり前節のマモル→マボル同様、オモとムクとの複合が完了しないかぎり、オモムクという交替形は表われない。この場合も、接続部分は、マ行音の連続になるが、緩慢な鼻音連続を避けて、破裂性の強い形をとるようになったと解しうる。

四

最後に、タハムル→タハブル(戯)の交替例を整理してみる。

《甲》タハムル……①戯タハムル〔倭2756〕②戯タハムル〔節(饅) 647〕・戯タウムル……狂タハムル〔節(黒) 783〕・戯タハムル〔節(弘) 1061〕・戯タワムル〔節(早) 994〕③天公モ人ニ戯テ薄相トシタワムレヲスルモノカナソ〔抄(四) 一九ノ一99ウ〕④Sōjite fitoua minonagi taunuregotonia mimino catanuge [キ口資(伊) 序e]・…yumenō Taunure yo [同(ロ) 96 e]⑤Taunure, Vide Taubure, Taunure, uru, eta Vide Taubure, uru. [日ボ]⑥セメテ別ヲ嘆(ク)事候(ハ)ハヤト戯レテ〔伽467 e〕

⑦ 飛花落葉の戯れも〔仮70ベ〕⑧ 戯たはふれ〔正〕むにまかふふの条29ベ〕⑨ 戯たはふれ〔譚〕ふをむととなふ類〕の条20ベ〕
 〔乙〕タハブル……① 譚太波夫留〔新〕天〕三6ウ〕② 戯タハブル
 ナ〔院訓〕慈伝C〕八126〕③ 睦れ戯れ〔梁342ベ〕④ 水嬉タハブル
 〔色〕前〕下120オ4〕・暴譚シヒタハブル〔同下86オ3〕⑤ 譚タハ
 ブル〔名〕図〕83ベ〕・説タハブル〔同〕観〕法上33ウ〕⑥ タハ
 戯たはふるゝとも〔仮文45ベ下〕⑦ 君はおほけなければとな
 むたはふれきこえ給〔和文〕源〕73ベ11〕・睦しき中に戯るゝも
 〔同〕徒〕194ベ〕⑧ 羣一娼タハブル〔室訓〕上杉隆憲氏藏漢書室
 町期点〕漢研〕801ベ〕⑨ 嗤タハブル〔倭852〕⑩ 戯タハブル〔下〕春〕796〕
 ⑪ 狂タハブル〔節〕文〕5643〕・戯タハブル〔節〕易〕971〕・狂タハブル
 〔節〕永〕963〕⑫ 嬉タハブル〔温1335〕⑬ 戯タハブル〔運1606〕⑭
 弄臣ハタハフレモテアソフ臣ナリ〔抄〕史〕一二23ウ〕・心カワル
 ケレハ此タワフレヲナイテ汗カタルソ〔抄〕叢〕四40オ〕・譚ハタ
 ワフレタ方ソ〔抄〕毛〕二12オ〕⑮ 戯太宰村路〔中朝資〕イ〕通用244〕
 ⑯ Tenxini taubure no cotoba naxi〔キロ資〕金〕本191〕・
 yumeno Taubureyo〔同〕ロ〕35ウ〕⑰ Taubure・Taubure,
 uru, eta〔日ボ〕⑱ たはふれ給ひけり〔伽226ベ〕⑲ 戯れ事や現ぞ
 と思はれ申〔仮117ベ〕

この語は、「M化第一類」に属す。〔乙〕⑤に、第三音節に双点が附されて表われるから、古く表記・音声両面でB形と考えられる。M形は、室町時代になってからみられるが、江戸時代の初期頃迄には、B形で表記されてもM形で発音されるようになったと

考える。

タハブルは、平安中頃には、ハ行転呼によって〔tafa^hburu〕から〔tapa^hburu〕になっていた。そして中世に—aga^h—anの流れにのり、さらにMB交替をも起こした〔タウブルータウムル〕〔甲〕②〕。これは、唇音後退の方向で捉えられるもので、タワブルータウムルのMB交替も、唇音連続の負担を、破裂性を除くことによって和らげたのであろう。

五

以上、三語を取り上げてみたが、MB交替現象で歴史的に問題となる語の殆どは、近世初期頃までには、その交替を完了しているとみなしうる。それには、バ行頭子音が、古くは〔b〕ではなくて〔m〕であったことが関係していると思われる。これによって、マ行音とバ行音とは、今日以上に近い関係にあったのであり、MB交替も〔m〕〔b〕を背景として行われたのであろう。語頭のバ行子音は、語中尾の場合よりも早く鼻音性を落していたと考えられ、語頭におけるMB交替の歴史的に明らかな例はムチーブチ〔鞭〕くらいしかなく、それも上代に近い頃から両形がみられることなどから、上代には鼻音性を落しつつあったとも、また殆どの語において落していたとも想像される。これに対して語中尾の場合は、上代から近世初期頃までの間に、徐々に鼻音性を落していったものであろう。

MB交替は、

- (1) 両子音が調音点の同じ、きわめて近い音であったこと〔m〕

と^(m)b)

(2) バ行子音が、^(m)V [b]の変化を徐々にとげていったことの二点を背景とし、交替に適当な環境にある音節に多く起こったものであり、さらに語源意識や類推によるものも多かったと思われる。

交替に適当な環境ということでは、複合の問題がまずでてくる。本稿でも、マモルーマボル(守)やオモムクオモブク(赴)のところで触れたとおりで、複合したことにより前部成素の影響から後部成素の第一音節に交替を起こすことがある。しかし、カタブクオカタムク(傾)〔M化第一類〕の如きは、M形が院政期までしか溯れず、それ以前はみなB形である。カタブクには、一般に「片十向ク」という語源説が信じられているようであるが、調査の限りではそれを裏附けるような結果は出ず、むしろB形の方が本来の形ではなかったかと疑わせる。B形の方が古いとすれば、カタブクはおそらくカタとブクとの複合連濁形であろうが、ただ複合し連濁しただけでは、MB交替は起こらない。カタブクがM形をもつようになるのは、オモムクやソムクなどからの類推によるところもあつたらうと思われる。マモルーマボルでもオモムクオモブクでも、複合して接続部分にマ行音が連続したが、このことが、この場合は交替の直接的原因になつていたのである。この場合には、後部成素語頭のマ行音がバ行音と交替する傾向が看取されたが、この類の語としては、オモムルオモブル(徐)〔M化第四類〕・カマミシカマビスシ(謙)〔B化第四類〕などを含めてよいと思われる。

次に、濁音の連続を回避しようとする傾向が、連濁の問題を中心に指摘されているが、MB交替に際してもうかがわれる。例えば、森田武氏の指摘があつたツバヒラカーツマビラカ(審)〔M化第一類〕がそれであつて、古くはツバヒラカと第三音節清音のち第二音節がマになるに及んで、第三音節が前の鼻音に影響されて濁音化し、ツマビラカの形をなした。したがつて、ツバビラカの形はなかつたとみるべきで、MB交替もそれを回避する方向で起こつている。またツクブーツグム(嘆)〔M化第一類〕も、第二音節が濁音化するのは、おそらく室町頃のことであろうが、その時にはもはや語尾のブはムに変化してしまつていた。

その他、負担の多い唇音連続を和らげようとする傾向(第三節参照)もうかがえるし、鼻音や長音との関係も複雑に絡んでいるものと思われる。さらに、MB交替現象には、類推、語源意識による影響もあり、各語の個別的な事情に左右される部分がきわめて多い。これらの諸事情を充分考慮した上で、MB交替の全体的傾向は捉えられるべきものと思う。

注(1) 有坂秀世(1)「古音推定の資料としての音相通の価値」

〔国語音韻史の研究〕所収、(2)「上代音韻攷」550べく557

べく横山辰次「mb二音の相通現象について」(音声学協会会報70)

◎松本宙(1)「キリシタンローマ字資料におけるマ行音バ行音交替現象の実態」(文芸研究42)、(2)「マ行音

バ行音交替現象の傾向」(国語学研究5)

◎土井洋一「音韻交替についての一解釈(上)」バ・マ行音の「ゆれ」を

(見よ) Catangué, ru B で書いても実際には M で発音する「日ゴ」。傾かたふく「羅」ふをむととなふ類」の条 20 ペ」などからすると、中世末には、もはや M 形しか口頭へのぼらなくなっていたものかと思われる。

以上のように、カタムク・カタプクは「M 化第一類」に属すもので、その語源を「片十向ク」に求めるのには、直ちに賛成するわけにはいかない。この問題については、亀井孝氏論文(↓注 1)に、「定石にしたがって解釈するかぎり、オモムク・ソムク対カタプクのくいちがいは、その由来を古代における方言間の交渉(≡借用)にもとむべきである」とある。

(12) 他にマムシューマプシ(蝮)も、M 形から B 形が生じたのであるが、その要因も同様に考えられる。

(13) 小倉進平「ライマン氏の連濁論」上・下(国学院雑誌 16 一 7・8)・金田一春彦「連濁の解」(SOPHIA LINGUISTICA II)

(14) 森田武「日葡辞書に見える語音連結上の一傾向」(国語学 108)

(15) 安詳ツハヒラカニ〔名(図) 90 ペ〕。監ツハヒラカ〔名(観) 僧中 8 ウ〕。在ツハヒラカ〔同仏上 45 ウ〕などの例から、これよりも古い例一。委曲二合ツ彼比良計吾〔曇中 5〕。纏ツハヒラケケ〔平初訓(天理図書館蔵金剛般若経集驗記平安初期点)「語研」519 ペ〕など一も第二音節濁音、第三音節清音と考えられる。M 形は、一ニツマヒラカ也〔色(黒) 中 28 ウ 2〕

。観纏ツマヒラカ〔名(観) 仏中 42 オ〕あたりからみえはじめるが、第三音節が濁音であるということの確例は、中世古辞書の類一。伴ツマヒラカ〔倭 42 2〕。詳ツマヒラカニ〔下(春) 51 5〕。不審ツマヒラカ〔節(文) 222 3〕。詳ツマヒラカ〔運 178 1〕一までくだる。「日葡」でも、「Tumabracana などとでてる。

ところで、遠藤邦基氏が論文(2)(↓注 1)で扱われた、観智院本類聚名義抄にみえる。ツマヒラカニ〔僧下 46 ウ〕のようなマに双点を附したのも、M、B 交替期において「tubaŋiraka」・「tu^hbaŋiraka」・「tumaŋiraka」の三者がごもごも行われた際、特に「tu^hbaŋiraka」の発音を示そうとした差声であつたのだろうと想像する。

ツバヒラカ一ツマヒラカの交替は B 形の第二・三音節が「^hbaŋi」⁽²⁾という唇に負担のかかる形であつたために起こり易かつたと見える。その上「tumaŋiraka」の形では、第三音節のヒがビに変化する。これは、前の「マ」の影響である。前に鼻音あるいは鼻音性の音があると、無声子音は有声子音になり易かつた。この場合は、「tuma^hŋiraka」になつたわけであるが、「^hbaŋi」の形は安定したものであつたのであろう。

* 本稿は、卒業論文(昭和 53 年 3 月)に手を加えたもので、その一部は「早稲田大学国語学会 5 月研究会」で発表した。本稿を成すにあたっては、辻村敏樹先生・秋永一枝先生・金井英雄先生の御指導をたまわつた。ここにお礼申し上げたい。